様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月８日現在

機関番号：12401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520091
研究課題名（和文）
東アジア世界における近世日本の祭祀秩序観の独自性の解明にかかる研究
研究課題名（英文）
Research on the characteristic idea about religious ritual of early modern Japan in East Asia
研究代表者
井上　智勝（INOUE TOMOKATSU）
埼玉大学・教養学部・准教授
研究者番号：10300972

研究成果の概要（和文）：儒教的「礼」は近世期の日本の祭祀に影響を与えていたが、それは近世期の朝鮮や越南とは異なる形であった。朝鮮や越南の政権は、中華帝国同様、儒教祭祀を遵行することによって正当性を確保したが、日本の場合は神国思想というエスノセントリズムと仏教によって、儒教祭祀は、その名称や実態はあっても、個性的なものにならざるを得なかった。この点、琉球も同様である。ただし、朝鮮や越南の儒教祭祀も、自国のエスノセントリズムの影響を強く受けていた。

研究成果の概要（英文）：Confucianism had affected Japanese national religious ritual in early modern period.But in the case of Japan, Confucianism religious service was changed by ethnocentrism(shinto) and Buddhism.The same may be said of Ryukyu.On the other hand, Korea and Vietnam secured justification by performing Confucianism religious ritual like Chinese Empire.However, the national religious ritual of Korea and Vienam was also strongly affected by the influence of their ethnocentrism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：東洋・日本思想史、儒教、国家祭祀

１．研究開始当初の背景
本研究の背景には、近世日本における式内社顕彰が儒教の「礼」を意識して行われていることを明らかにした自身の研究と、2000年代に入ってから飛躍的に進展した中国・韓国における国家祭祀研究の存在があった。それらを通じて指摘できるのは、17世紀から18世紀前期の東アジア諸国において、祭祀秩序は儒学的「礼」に基づいて構築されるという点で共通していることである。しかし、その在り方は在来宗教やエスノセントリズムの掣肘の度合いによって大きく異なる。かかる差異に注

目して諸国の祭祀秩序とその背景にある思想を比較することは、日本の宗教的個性を明らかにするとともに、関連する分野の従来の研究状況を進展させることができると考えた。

２．研究の目的

本研究は、儒学的「礼」の影響を強く受けながらも、神道的要素(神国思想など)の掣肘を受けて形成された近世日本の祭祀秩序観を、東アジア諸国のそれと比較することによって、近世日本における「礼」の受容形態の個性を、祭祀の面において解明することを目的とするものである。なお、本研究はあくまで為政者・知識人の意識およびそれを反映した制度レベル―国家祭祀―の研究であり、例えば在地における祭祀の実態と秩序観の乖離など、祭祀の実態までを問題にするものではない。これは実態研究の軽視を意味するのではなく、まずはそれらを規制しているであろう意識・制度レベルの歴史的状況を把握し、実態研究が共通に依拠することのできる基盤形成を行うことを目指すためである。

３．研究の方法

(1)：近世日本における祭祀秩序観の確認ならびに資料収集

①幕藩領主・儒学者らの理想とする祭祀秩序観と、宗廟・社稷等の儒教祭祀が日本の祭祀の何に比定されているかについて文献から抽出・集成する。

②近世を中心に「二所宗廟」(伊勢・八幡)に関する資料を収集・集成する。

③近世の頂点的武家の霊廟祭祀に関する研究史の再確認と資料の収集・検討・集成を行う。

(2)：中国(明・清)・朝鮮・越南(ベトナム)・琉球の祭祀秩序観観の確認ならびに資料収集

中国(明・清)・朝鮮・越南・琉球の宗廟・社稷等の儒教祭祀観を比較する。

①陳戍國『中國禮制史：元明清卷』(湖南教育、2002 年)／韓亨周『朝鮮初期國家祭禮研究』(一潮閣、2002年)／金海榮『朝鮮初期祭祀典禮研究』(朝鮮時代史研究叢書、集文堂、2003 年)／豊見山和行『琉球王国の外交と王権』(吉川弘文館、2004年)などによって、中国(明・清)・朝鮮・琉球の宗廟観・社稷等の祭祀観を確認し、必要に応じて資料の充実を図る。

②『大越史記全書』『歴朝憲章類誌』などの文献や、『越南漢喃銘文拓片總集』所載の金石文などによって、ベトナムの宗廟・社稷等の祭祀観を示す記述を抽出し、理解する。

(3)日本・朝鮮・ベトナム・琉球の宗廟・社稷等の祭祀秩序観を相互比較し、差異と共通点および日本の祭祀秩序観の独自性を解明する。

４．研究成果

(1)近世日本における祭祀秩序観

①近世日本の宗廟観には、(ア)二所宗廟観・天皇霊を祭神とする神社とする中世以来の伝統的宗廟観、(イ)武家家廟を宗廟と呼ぶ事例、(ウ)地域・同族の鎮守神という宗廟観、の3つの宗廟観が併存していたことを確認した。(ア)は、伊勢を第一宗廟として重視し、天皇～庶人に至る崇敬を集めるべき惣氏神と位置づけるもので、最も一般的な理解である(イ)は、儒典に照らした場合最も本義に近いが、近世に至って鴻儒大名によって導入された新しい観念である。かかる考えはあまり定着することなく、日本では一般に仏教寺院が諸侯の宗廟に相当する活動を担っている。(ウ)については、九州でその事例が濃密に認められ、17世紀の前期から用例がある。だが、かかる用例は中世に遡り、九州にとどまらず用例があることも確認した。なお、社稷については、(ア)の立場を前提に、それに次ぐ神社を擬する場合が多い。

天皇の祖先神を宗廟と見なす感覚は、

儒教的「礼」の本義を残すものである。だが、それとても昭穆秩序に則った、儒教的宗廟ではない。それはむしろ、寺院において見られるもので、日本においては儒教祭祀と仏教が親近性を以て捉えられていたことを示す。さらに地縁的な守護神にこの名を用いている場合は、もはや儒教とは異質な感覚である。総じて、日本の宗廟・社稷観は、例外的なものを除いて、儒教的「礼」からは逸脱した、神道祭祀であった。

②近世日本の国家祭祀は、伊勢・八幡の「二所宗廟」を頂点とする体系に依拠して行われていたが、徳川氏の家廟である東照宮もそれに準ずる形で遇されていた。だが、これは徳川家がその権力を背景に国家祭祀の列に組み込んだもので、恒例国家祭祀にこそ与ったが、朝廷による臨時祈祷の対象にはならなかった。このことは、徳川家は国家的規模の臨時祈祷を催す場合、必ず「二所宗廟」を組み込んでいることと対照的である。

(2)東アジア諸国の祭祀秩序比較

①徳川政権を「徳川王権」と位置づける動向に対し、それが恒例の国家祭祀権を欠いていることを中国・朝鮮・ベトナムの国家祭祀との比較を通じて指摘した。あわせて儒典に則り、宗廟祭祀のほかに天地・社稷祭祀を重視する中国・朝鮮・ベトナムの「大陸モデル」と、それが在来宗教やエスノセントリズムの掣肘によって変質した日本・琉球の「島国モデル」の、近世期東アジア世界における国家祭祀の二類型を措定した。「島国モデル」では、宗廟祭祀に相当する祭祀に仏教の影響も顕著である。武家霊廟の祭祀もまた、「島国モデル」における諸侯の宗廟祭祀であるといえよう。

②近世日本の国家祭祀は、東アジア世界での国際的な文明の表象である儒教に準拠しようとしながらも、自国優越思想である神国思想に大きな影響を受けていた。日本では儒教という国際標準の思想と神国思想というエスノセントリズムの両者を満たすことが要請されていた。そこに現れたのが、神社祭祀を宗廟・社稷に準える国家祭祀の在り方である。

実は「大陸モデル」に属する朝鮮やベトナムの儒教祭祀もまた、自らのエスノセントリズムに大きな影響を受けていた。朝鮮は「小華」つまり小中華として、諸侯国の分を守ることで、自己の政権の正当性を主張した。したがって、諸侯として越権となる祀天などは基本的に行わなかった。かたやベトナムは、北の中華帝国と共に天を支える「南国」として、中華帝国の皇帝同様の祭祀を行った。このように「大陸モデル」の諸国では、斉しく儒教祭祀を遵行しながらも、一方で国内のエスノセントリズムを満たしながら祭祀を行っていた。

(3)本研究の成果の特色

①ベトナムという視点

本研究の特色の一つに、これまでの東アジア研究では捨象されることの多かったベトナムを含めて、比較研究を行った点がある。さしあたり、ベトナムを含めた東アジア研究の推進の必要性と、それが祭祀を対象とした比較研究という手法に拠って行い得ることの有効性を主張できたと考えている。加えて、ベトナムは日本の室町から江戸時代に相当する時期、皇帝と王という国家的権威と執行権力が分散した政体を有した点でも、天皇と将軍という政体を有した日本と近似する。元寇を撃退したことで、エスノセントリズムの高

揚を見た点も相似する。本研究では祭祀という点に限ったが、中華帝国の東と南の辺縁に位置する両国の比較研究はさまざまな面においてなされるべきであり、本研究はそれを提起した点においても意義を有する。

②国家祭祀から近世日本の国家権力を検討

これまで、近世日本の国家権力には、朝廷―幕府という国家的権威と執行権力の分散に照応して定見がなかった。その状況は現在も続いているが、本研究では、近世日本の国家祭祀という問題を、朝廷と幕府による祭祀の執行と神国思想・儒教的規範を踏まえながら検討し、一定の見解を示すことができた。祭祀という視点から、国家権力を照射しようとする試みであり、それを東アジアの視点から位置づけた点に意義を有すると考えている。

(4)今後の展望

①以上は、いずれも近世日本の祭祀秩序観を、そのエスノセントリズムを踏まえながら、東アジア諸国との比較において検討することで得られた成果である。祭祀面における儒教的「礼」の受容形態の日本的個性の解明を目指した本研究は、さしあたり所期の目標を一定度達成するだけでなく、図らずも東アジア諸国(特に中華帝国から「蛮夷」と位置づけられた国)の国家祭祀とエスノセントリズムとの関係性を明らかにするところまで到達することができた。この成果を、韓国・台湾の研究者に伝えることができたことも、本研究にとって大きな意義を有する。今後は、かかる視座をさらに発展させ、さしあたり人神祭祀に焦点を当てて、ベトナムを含めた東アジア世界の国家と祭祀に対する研究を推進する中で、日本の個性を考究する研究を推進してゆきたいと考えている。なお研究推進に当たって、金津日出美(高麗大學校・助教授)、金仙熙(高麗大學校・研究教授)、許元寧(高麗大學校大学院生、2010年当時)、李豪潤(立命館大学・助教)各氏には格別のご高配を賜ったことを附記しておく。

②武家霊廟の研究については、必ずしも十分な研究が推進できなかったが、「島国モデル」においては、儒教の宗廟祭祀が寺院祭祀として展開していることを認知することができた。神国思想というエスノセントリズムとの関連のみならず、上野国の前田家御寶塔において確認できたような、仏教と儒教の日本的融合形態―儒仏一致―の状況についても検討を重ねてゆくことによって、日本における宗教面での儒教的「礼」の受容の個性がさらに明らかになってゆくと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①井上智勝「天皇と黎帝・将軍と鄭王―日越国家祭祀比較研究序説―」『宗教研究』85-4　227-228頁　2012年　査読無

②井上智勝「天子の宗廟・日本の宗廟―近世日本における二つの宗廟観と伊勢信仰―」『埼玉大学紀要(教養学部)』47-2　1-13頁　2012年　査読無

③井上智勝「近世日本の国家祭祀」『歴史評論』743　4-18頁　2012年　査読無

④井上智勝「「蛮夷」たちの「中華」―近世期日本・朝鮮・ベトナムの小中華意識と国家祭祀―」『新しい歴史学のために』279　36-51頁　2011年　査読無

⑤井上智勝「東アジア諸国の国家権力と祭祀」『宗教研究』84-4　308-309頁　2011年　査読無

⑥井上智勝「近世期の東アジア諸国における国家祭祀―中国・朝鮮・ベトナム・琉球から徳川政権を考える―」『東アジアの思想と文化』3　33-52頁　2010年　査読有

⑦井上智勝「近世日本における宗廟観」『宗教研究』83-4(363)　2010年　440-441頁　査読無

〔学会発表〕（計５件）
①井上智勝「近世期日本・朝鮮・ベトナムの小中華意識―國家祭祀との關連を中心に―(근세기 일본・조선・베트남의 소중화의식―국가제사와의 관련을 중심으로―)」　第３回全北大學校 ―立命館大學學術交流會議　平成24(2012)年２月７日　全北大學校(大韓民國)

②井上智勝「天皇と黎帝・将軍と鄭王―日越国家祭祀比較研究序説―」日本宗教学会第70回学術大会　平成23年９月３日　関西学院大学（兵庫県）

③井上智勝「近世宗教社会史研究の現状と課題」　日本宗教史懇話会サマーセミナー　平成23年8月26日　京都エミナース(京都府)

④井上智勝「東アジア諸国の国家権力と祭祀」日本宗教学会第69回学術大会　平成22年9月5日　東洋大学白山キャンパス(東京都)

⑤井上智勝「近世日本における宗廟観」日本宗教学会第68回学術大会　平成21年9月13日　京都大学吉田キャンパス(京都府)

〔図書〕（計２件）
①井上智勝「前田家御寶塔―上野国七日市藩の藩祖顕彰と幕藩領主の「大祖廟」―」　山本隆志編『日本中世政治文化論の射程』思文閣出版　2012年　80-100頁(総頁344頁)

②井上智勝「社家(神社世界)の身分」堀新・深谷克己編『<江戸>の人と身分3　権威と上昇願望』　吉川弘文館　2010年　187-215頁(総頁240頁)

〔その他〕
①大阪歴史博物館特集展示「大坂の伊勢信仰とおかげまいり」　会期：自平成21年9月21日至同年11月9日　会場：大阪歴史博物館８階特集展示室　展示解説：井上智勝(9月19日・10月17日・11月7日)

②井上智勝「江戸幕府は“王権”か―中国・朝鮮・越南・琉球との比較から―」　なにわ歴博講座　平成23年3月25日　大阪歴史博物館(大阪府)

６．研究組織
(1)研究代表者
井上　智勝　(INOUE TOMOKATSU)
埼玉大学・教養学部・准教授
研究者番号：10300972